

★ 楣 ～ 開口部の幅や、真壁・大壁の併用造りによって違いはあるが、柱間に取付ける。基本的に楣の大きさ寸法は柱と同じ位とし、特に開口部が引違いや引き分け戸等で柱間が広い場合の楣の成は柱寸法より少し大きい材を使用する。柱との仕口は傾ぎ大込れ柄差し補強金物締めとし、特に開口幅が広い場合、楣上部軸組に方づえ・はかま腰入れ・添木入れ等で補強し、楣材の歪に注意し背を上端に架設すること。外力に対し軸組補強の役割をもつ部材である。

開口幅の狭い楣は上記の窓台の項と同じ考えで架設する。

#### ● 力 貫 (ちからぬき)

主として真壁構造(併用型壁の場合も使用する)の軸組で開口部の化粧材で柱間が1間以上2間半位迄の(中連窓敷居、鴨居、欄間鴨居、無目鴨居、落し掛け。)もので歪み、撓みや曲り等が起らない様に固定する為の下地材である。

力貫は化粧材を固定する部材だけでなく、外力に対し軸組補強の役割をもつ部材であり、水平部材の力貫と同じく仕口は柱面とし、柱に彫込み独鈷締めとするが、金物やボルト締め(上下2本)とする。横曲りのない材料(真持材)で背を上端とし取付ける。継手のない1本材とし力貫の大きさは(寸法)は幅(厚さ)は50～45mm(1.7～1.5寸)位、成は120～180mm(4.～6.寸)位を使用する。化粧材とは18～24mm(6～8分)位のあきをたもち取付ける。必要長さは仕口によって多少異なるが柱真々+50mm位とする。下地塗り壁の場合、力貫上下面を少し削ぎ、面は鋸目入れ(魚目型)や手鉋なぐりなどの加工とする。

#### ● 筋 違 (すじかい)

筋違架設か所は軸組面各々か所(一節毎)に偶数(本数)とする。所要長さ別に拾い出すこと。階毎に分別すること。数量(本数)一般的な建物での目安として柱数の1/2の数量(偶数本数)を基準とする。

○筋違の角度による負荷率について、外力「稜」のか所で水平力に対する筋違の負荷率で(外力を1)は、筋違と横架材の角度で、 $30^{\circ} \sim 1.2$ 、 $45^{\circ} \sim 1.4$ 、 $60^{\circ} \sim 2.0$ の率となるので、普通の住宅では柱間5間が最適である。筋違は外力圧縮と引張りの力がかかるので交互に架設すること。大きさ(寸法)は柱二つ割り、柱三つ割りを使用する。

#### ● 壁 貫 (かべぬき)

木舞掻き荒壁塗り下地材であり軸組の横架材で柱と固定締めつける部材である。現在の在来軸組工法では、普通壁貫の架設か所、地貫(一段目胴貫)・胴貫・内法貫・天井貫の4か所を架設する。桁行方向の貫くさびは貫天端で～貫端部の柱仕口は落しかまにしぬきくさびを打ち締める。柱通し貫の柱仕口は渡りあご掛け(下げかま)にてぬきくさびを打ち締める。梁間方向の貫くさびは貫下端で～貫・仕口は桁行と逆に架設し貫の高さを桁行、梁間方向とも同じ位置とする。(古代建物は貫の位置を変えてぬきくさびは貫天端で打ち締めた。)貫の継手は柱真にて架設する。四方かま、2枚かま、略かままたはさば口、差し合わせ込せん打ち、などがある。